

1A 聖霊による告白 1-3

1B 「知らないでいてほしいこと」 1

2B 物言わぬ偶像 2

3B 「イエスは主」という告白 3

2A 多様性の一致 4-7

1B 賜物 4

2B 奉仕 5

3B 働き 6

4B 「皆の益」という目的 7

本文

私たちは、二回に渡って聖霊のバプテスマについて、聖書から見ていきました。聖霊によるバプテスマは、イエスを証しするための力を与えてくれます。したがって、自分の内に働いてくださる御霊の働きとは異なります。イエス様を信じた時に与えられる御霊は、私たちが新しく生まれさせ、神の子供としてくださり、神の国を受け継ぐようにして下さいます。この肉体を離れて、天からの復活の体を与えられるまでに、私たちがキリストの似姿へと近づけてくださる働きです。

それと聖霊のバプテスマは異なります。教会がこの世に対して証しをする、外側の働きかけです。その中で、聖書には教会に聖霊がご自分の賜物を与えられることを教えています。神は内側で働いてくださるのですが、外側でも働いて下さいます。これが、教会が単に聖書塾のように、聖書を学ぶところではないこと、またサークルのように仲間で楽しむ所でもないことを教えています。キリストを楽しむだけでなく、その交わりの楽しみを人々に知らせる働きを、聖霊は行って下さいます。

そこで神は、私たちに御霊の賜物を与えて下さいます。今日は、コリント第一 12 章 1-7 節までを見ていきたいと思えます。8-11 節また 28 節に、御霊の賜物が列挙されています。ですので、その導入部分を今晩は見たいと思っています。キリストの体に与えられている聖霊の賜物については、その他、ローマ 12 章、またエペソ 4 章にもあります。ローマ 12 章では、「熱心に」とか「勤勉に」という言葉が特徴ですが、教会の運営において神の下さる賜物です。人目には地味な奉仕ですが、そこに兄弟愛があり、霊に燃えて主に仕える部分を見ることができます。エペソ 4 章では、キリストが立てられる指導者としての賜物です。使徒、預言者、伝道者、そして牧者また教師です。立てられた人が聖徒を奉仕の働きに整えることによって、キリストの体が成長することについて書いてあります。

そしてコリント第一 12 章では、超自然的な現われを伴う、しばしば「カリスマ」とも呼ばれる賜物

が多く書かれています。上から与えられるもの、教会が決して地に属するものではなく、天に属していることを証するもの、それぞれが主から直接語りかけを受け、そして互いに聖霊による癒しと慰め、励ましを受けるという類いのものです。

コリント人への手紙第一の背景は、「幼さ」があります。コリントという町は非常に乱れていたところでした。「コリント人」という呼び名は、「歌舞伎町の人」のような響きを持つと言われていました。しかし、そこにリバイバルが起こりました。パウロは一年半そこに腰を据えて、教えました。しかし、その幼さから数々の問題が起こりました。仲間割れが起こりました。深刻な不品行の問題がありました。偶像礼拝をキリスト者の自由の名で行っている人もいました。女性の権利を主張するため、被り物を取るという礼拝の秩序の乱れもありました。そして主の聖餐にあずかるのに、酒を飲んで酔ってやってきたりと、乱れていたのです。それをパウロが、一つ一つ父が子に指導を与えるように、聖書的、霊的な方法で正していったのです。

12章は、12章から14章までがひと塊になっている、その一部です。コリントの教会は、たくさん学ぶ教会でした。1章5節に、「あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。」とあります。パウロが腰を据えて一年半いたのですから、そうやって不思議ではなかったでしょう。けれども、数々の問題が起こっていたのですから、言葉や知識が私たちの霊性を保証するものではありません。そして、7節には、「あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現われを待っています。」とあります。御霊の賜物も十分過ぎるぐらい与えられていた人々なのです。ところが、その御霊を乱用して用いていたことが、12章から14章までを見ると認めることができます。それで教会の礼拝に混乱が起こっていました。御霊の賜物が豊かに与えられているからといって、それが私たちの霊性を保証するものではないことが、ここから分かります。

1A 聖霊による告白 1-3

1B 「知らないでいてほしいこと」 1

12:1 さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいと思います。

パウロは、話題を変えています。11章において、主の晩餐についての乱れを正しましたが、12章では御霊の賜物について話します。正確には、「霊的な事柄についてですが」となっています。けれども文脈から、御霊の賜物について話し始めることは明らかです。

そして、「ぜひ次のことを知っていただきたいと思います。」と言っています。英語ですと、”I do not want you to be ignorant”となっており、「無知であっていてももらいたくありません」と書いてあります。コリントの人々に、知らないでいてほしくない願っています。コリントにある教会、いや他の教会でもそうですが、使徒たちの教えに反する、他に数多くの偽預言者や偽教師たちがいました。

これらの預言者や教師たちが巡回して、「私たちはエルサレムから来た。パウロは私たちのように認証を受けていない。」などと言って、自分たちの地位を、パウロを引き落とすことによって確保していました。ともかく、いろいろな教えが外部から入り込んでいました。そのために、教会でも混乱が生じていました。

これは、今の教会でも同じです。霊的に神が誰を主に置いてくださり、自分を養うようにして下さっているのか、それを見分けることができずに、いろいろな教師の教えを聞き入れて、それで混乱し、霊的成長に役に立たないものを受け入れている、ということはしばしば起こっています。

そして、パウロは他にも教会の中で、理解されていないこと、それによって混乱が起こっていることについて、「知らないでいてほしくない」と話しています。この手紙の 10 章 1 節には、「私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいのです。」とあります。そして、イスラエルの荒野の旅は、実はキリスト者の霊的な救い、その後の歩みを予め表しているものであることを教えていました。紅海を渡るのは、水のバプテスマを示しており、天からのマナは御霊による食べ物、岩からの水も御霊による飲み物、岩はキリストを指しているということです。そして彼らが荒野で滅んでしまったのですが、コリントの人たちはおそらく、「旧約時代に起こったことは、私たちには関係はない。我々は御霊の賜物を受けたのだから、しっかりと立っている。」と思っていたのでしょう。しかし、パウロは、世の終わりにおいて、これらを教訓にして、しっかりと立っていなさい、と諭したのです。

今の教会において、旧約時代のことは教会には当てはまらないとする人々がいます。旧約の時代は終わり、新約の時代に入っているのだから、旧約聖書に書かれていることを私たちに当てはめてはいけない、という教えがあります。これは、使徒によれば歪んだ教えです。イスラエルの民の歩みは、キリストご自身を証ししており、今の私たち新約時代の者たちへの教訓と戒めとなっています。

そして、ローマ人への手紙 11 章 25-26 節には、こう書いてあります。「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。」ここでは、福音を受け入れる人々が異邦人の中で圧倒的多数で、肝心のユダヤ人が受け入れないという事実に対して、異邦人信者が「イスラエルは見捨てられて、代わりに私たちが選ばれているのだ。」と誇り高ぶっている傾向に対して警鐘を鳴らしています。

このことも、教会にしばしばあります。確かにイスラエルの民は神によって頑なにされました。けれども、異邦人のキリスト者も神の慈しみに留まっていなければ、倒されるのです。イスラエルは倒れたが我々は倒れないという驕りに陥りかねません。先ほどのコリント第一 10 章での問題と同

じです。そして、初めに選ばれたイスラエルも神は必ず救われるということ、しかも思いもつかない方法で、つまり異邦人の救いの完成がなされて、それからイスラエルを救うと神は約束しておられるのです。

そして、テサロニケ第一 4 章にも、パウロは同じ言葉を使っています。「4:13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。」そしてパウロは、これら信仰を持っているのに、主の来臨にあずかることのできなかった人々がよみがえる希望を教えました。初めに彼らがよみがえり、それから生き残っている私たちが引き上げられ、天から降りてこられたキリストに空中でお会いすることになります。それから、パウロは主の日について語ります。地上に降る神の怒り、その患難であります。キリストの内にある者はこの怒りに会わないように定められていると慰めるのです。つまり、携拳それに引き続く患難についてパウロは語っています。

どれもこれも、実は今の教会にも欠けているものです。いろいろな教えがあり、しばしば対立しています。したがって、牧者また教師はこのような話題を教えることを躊躇しがちです。そのような危険を冒したくないと思います。他にも理由があるかもしれません。神学校では組織神学というものを教えます。聖書論、神論、罪論、キリスト論、聖霊論、教会論、そして終末論など組織的に、体系的に神学を教えるというのですが、終末論は最後に来るそうです。(ちなみに、私は授業で終末論を別個に、じっくりと学びました。)したがって、終末論のところに入ると、もう学期末が近づいてじっくりと教えてもらうことができない、そこで先生が「各自で学び、自分で決めるように。」となる、とある方が教えてくださいました。なんか、歴史の授業に似ていますね。日本の歴史認識問題が問われていますが、現実には歴史の教科書の最後に近現代史があるので、さっと流されるか、自習ということになります。けれども、今、このグローバル社会に生きていて近代史は重要です。それと似たようなことが、キリスト教会の中でも起きているのかもしれない。

そして、御霊の賜物についてですが、これも同じく知られていない神の真理です。聖霊の賜物を強調する人々の間でも、聖霊の賜物の働きを否定的に見る人たちの間でも知られていません。賜物が今日ないと思っている人々の間では、超自然的な賜物の付与については、感情的に警戒します。それは、聖霊の賜物を用いているとされている人々の間で、乱用がしばしば見られるからです。終末についてもそうですが、携拳となりますと、必ず何月何日、イエスが戻ってこられるという人々が現われます。それで、携拳そのものを信じていないと公言する人がいます。極端に反応しています。しかし、パウロはそのような乱用や極端に対して、丁寧に細かく正しています。したがって、その細かい指導に従っていけば、乱用から守られ、神の栄光を現すことができるのです。

2B 物言わぬ偶像 2

12:2 ご承知のように、あなたがたが異教徒であったときには、どう導かれたとしても、引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした。

コリントにある教会、またパウロが奉仕した多くの教会がそうですが、異邦人が大半の教会であります。そこで、異教文化や社会を濃厚に持っている人々に対して働きかけていました。10章においても、異教の神に肉を捧げている者たちに戒めを与え、「それは悪霊にささげているのだ。」と注意しました。ここでパウロが指摘しているのは、異教の中でも超自然的な働きがいろいろ行われているけれども、結局、連れて行かれるのは「ものを言わない偶像」だ、ということです。

主はイスラエルの神に、こう語られました。「申命記 13:1-3 あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」と言っても、その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。」徴や不思議を示しても、その預言者が導くところは、他の神々でありませぬ。そんな徴を行っているから生きている神に導くのかと思われるかもしれませんが、生きていない、偶像なのです。

詩篇の著者もこの問題に取り組みました。「115:2-8 なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。」私たちの神は生きておられますが、肉眼で認めることができません。異教徒はそれを突いてきます。そこで詩篇の著者は反論します。では、あなたがたの神々はどうなのか？と。目があっても見ることができず、耳があっても聞くことができず、口があっても話すことができないではないか、と。これがパウロの言っていた、「ものを言わない偶像」です。

そして大事なのは、「これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。」ということです。偶像を造り、偶像に仕えようと、偶像と同じように感覚が無くなってしまふということです。そのことを、同じく異教の文化と社会の中にいたエペソの人々にパウロが話します。「エペソ 4:17-20 そこで私は、主にあつて言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっています。しかし、あなたがたはキリストのことを、このようには学ばませんでした。」見えるものが見えなくなり、聞けるものが聞こえなくなり、それで語るべきことが語れなくなります。そして好色を貪るようになる、とパウロは言います。

3B 「イエスは主」という告白 3

しかし、聖霊に導かれる時はそうではありません。12:3 ですから、私は、あなたがたに次のこと

を覚えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。

聖霊によれば、必ず「イエスは主である」という深い確信と信仰告白から始まります。聖霊が語ってくださるのです。ですから 8 節以降にある御霊の賜物には、知恵や知識の言葉、預言の言葉、信仰、そして異言やその解き明かしなど、私たちに語りかけてくださる神であることを証ししてください。

ここで、恐らく異教の影響からか、悪霊によって超自然的なことが起こっている混乱があったと思われれます。誰かが、「イエスはのろわれよ。」と語ります。これはいくら超自然的な現象であっても、イエスを呪うことは決してありません。同じように、聖霊によるのであれば必ず、「イエスは主です。」という真実な告白が必ず出てくるのです。イエスは主、というのは私たちの告白の最も短く、かつ基本的な告白です。これがいかに私たちの生活の中で確立しているかで、驚くべき聖霊の働きを見ることができるし、また霊的な神の国の拡がりを見ることができます。

そして反対に、真正な聖霊の働きを悪霊のせいになろうとする動きもあります。パリサイ人や律法学者も、イエスがキリストであることを示す聖霊の働きについて、悪霊のせいになりました。例えば、誰かが異言で語っている時に、「イエスは呪われよ、と言っていた。」という噂があります。このような噂は、聖霊の働きを反動で否定する人々の間で囁かれています。これは古い噂で、そのような噂は「誰々から聞いた」という伝達のみで、情報源にたどり着くことはできません。

しかし、このようにしてパウロは、御霊の賜物の中身に入る前に、第一に、聖霊は語ってくださる方であること、第二に、聖霊はイエスが主であるという根幹の信仰告白に基づくものであることをしつかりさせました。

2A 多様性の一致 4-7

そして 4 節から、「聖霊の働きは多様性があるが一致している」という点で話していきます。

1B 賜物 4

12:4 さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。

御霊の賜物について、パウロが 8 節から列挙していきます。8 節から 11 節までに、九つの賜物を列挙しています。その他にも後で 28 節に列挙しています。このように多様な賜物なのですが、御霊は同じ御霊なのです。ですから、賜物は互いに競争したり、対立することはありません。キリストの体が一つであるように、その各器官が調和しているように、賜物も調和し、その多様性の中で見事な一致を見るのです。コリントの教会では、それができていませんでした。多くの人が礼拝の時に異言を語っていました。しかも、ある人が語って、同時に他の人も語りました。初めて来る

人、未信者の人がこれはいったい何なのか？と首を傾げて、なんら悔い改めに導かれていない、内側のお祭り騒ぎになってしまっていました。一人一人は、主から導かれて語ったと言っている、同じ御霊がどうしてそのように混乱を引き起こすことができえましょうか。神は平和と秩序の神です。

むしろ異言を語る人もいれば、解き明かす人もいます。そして異言ではなく、預言を語ることを勧められています。そして信仰の賜物を用いる人もいますし、知識や知恵の言葉が与えられる人もいます。癒しの賜物が与えられる人もいます。ある人が何かをしているから、自分がそれをするのではありません。むしろ、人々に気づかれないうところで、弱い部分に仕えている人もいます。いろいろな人がいて、それで教会であります。

教会の姿を表しているのに、よみがえったラザロの家の姿があります。「ヨハネ 12:1-3 イエスは過越の祭りの六日前にベタニヤに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。そしてマルタは給仕していた。ラザロは、イエスとともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。」マルタは、給仕で忙しいです。マリヤはイエス様に香油を注ぎました。そしてラザロは何もしていません！けれども、甦ったということ自体が証しになっていて、重要な働きをしています。

一つの賜物に対して、多くの人が欲しがるといえます。それが魅力的なのか、何なのか分かりませんが、みんな一つところに集中します。けれども、他の賜物に対しては誰も目を向けません。パウロは後で、それを体の中の器官で例え、そうではあつてはいけなことを戒めます。「1コリント 12:23-25 また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになります。かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。」

2B 奉仕 5

12:5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。

賜物があり、それを用いて主に仕える奉仕があります。それにもいろいろな種類がありますが、私たちは同じ主、イエス・キリストを信じています。賜物と奉仕の違いですが、例えば同じ教える賜物でも、私のように日曜礼拝の説教の取り次ぎをしている人もいれば、教会学校の先生もいます。そして重要なのは、弟子を造ることです。これは責任のある関係を結び、ほぼ一対一である兄弟あるいは姉妹が、他の兄弟や姉妹に主のことについて教えるのです。そして、牧会者はそのような聖徒の奉仕を整えるために、牧会という奉仕をします。牧会者とそうした弟子作りをしている一

人一人との連携がとても大切です。

自分が何か誰かを導いて、誰かの相手をしたいと思われている方は、自分自身が誰かの指導を受けているか確かめてみてください。指導といっても、私のことだけではありません。霊的に成熟した、整えられた兄弟や姉妹の下に自分があるのかどうか確かめる必要があります。教えることができても、教えられることができなければ教える資格がありません。私も全く同じであり、兄弟姉妹と交わりをして、そのお話を聞いて主から何をしなければいけないかを常に問わなければいけません。そして他の教会の指導者との交わりによって、自分を主の教えの下に置かなければいけません。

なぜそのようなことをするのか？それは、「主は同じ主」だからです。いろいろな奉仕があっても、仕えている方は一人です。ですから、一つ一つの奉仕はつながっています。その奉仕はいろいろあっても、それが全く異なる奉仕に見えても、どこかで「一つだ」という感覚が与えられている共同体が、キリストの体です。

3B 働き 6

12:6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。

「働き」であります。これは、同じ賜物であり、そして同じ奉仕であるけれども、同じ奉仕であってもその働きがいろいろあるということです。例えば、同じ教える賜物があり、同じ牧会という奉仕があるけれども、牧会の働きには一つ一つ異なる、ということであります。例えば、私とカルバリーチャペル西東京の山東さんは、同じ賜物が与えられ、同じ奉仕をしています。でも、働きが違います。しかし、しっかりと聞いている人にとっては、同じことを話していることに気づきます。

これを、「あの人は知識が足りない。」であるとか、反対に、「あの人は知識ばかりで、適用がない。」とか比べたり、一人を持ち上げて、一人を見下げるようなことをすれば、どうなるでしょうか？それは、どちらも立てておられる神を否定することになるのです。すべての働きをなさる同じ神がおられるのです。

これは礼拝の持ち方が違う、カルバリーチャペル以外の人々とも同じであります。カルバリーチャペルの中ではかなりの一致があります。けれども、他の兄弟姉妹と交わるとかなり違います。ある教会はとても形式を重んじます。またある所では、かなり大きな声で賛美をして、にぎやかです。どちらの礼拝が正しいということではないのです。どちらの礼拝に出ても、同じ神と主イエス・キリストをあがめることができているという感覚を持つことができれば、自分の霊は正しい所にいると言えます。

私は先ほど、終末論について議論しました。それには、しばしば教えられていないことを話しました。けれども、私がとても嬉しいのは、私と同じように信じていない人々と共に主を礼拝できることです。自分の教会ではない方々、おそらく終末論の信じ方も違う方々と共に交わることができ、主を礼拝できることです。もちろん、そこには自分が何を信じているのか、聖書からしっかりと確信しているものを持っていないといけません。そのことにぶれることはないし、決してあつてはいけません。その上で、自分とは同じように信じていない兄弟たちがいても、そこにキリストを見ることができのです。これは驚くべきことであります。もし、その兄弟はキリストの体に属していないのではないかと感じたら、それは彼が外れているのではなく、自分自身が外れているのです。

このように一致と多様性があるというのが、御霊の働きです。ここで、御霊、主、神と三位一体の神が現れていることに注意してください。神ご自身の中に複数の人格があります。神は一人であられるのに、「我々」とご自身を呼ばれます。父、子、聖霊と三つの位格なのに、「御名」は単数形です。ですから教会も、いろいろあるのになぜか一つであるという不思議を見るのです。

4B 「皆の益」という目的 7

12:7 しかし、みなの益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。

御霊の賜物を取り扱うにあたって、ここはとても重要です。「みなの益となるために」ということであります。「賜物」と聞くと、それは能力であると考えると大きな間違いです。能力開発という言葉がありますが、それは自分の能力を発展させるという自分中心の言葉です。しかし、賜物は自分のためではなく、「みなの益」であります。昔、私は賜物発見シートのようなものを、ある教会で受け取ったことがあります。自分にどんな賜物があるのかを発見させるものです。私はとても違和感がありました。他の多くの兄弟姉妹との関係や交わりのことを考えずに、どうして賜物のことを考えられるのか、と思いました。

もし教会全体のことを考えられないのなら、この教会を教会として愛していないのであれば、御霊の賜物の現われを望むことはできません。自分はこの分野で何かをできると思って教会に来るのであれば、それは自分の能力を披露するのであって、賜物を用いていることではないのです。賜物の前に、キリストの体に属していること、その交わりそのものが自分の大いなる喜びになっている時に、初めて賜物の現われを期待することができます。反対にいうならば、自分が教会にすることが喜びになっていれば、自分に賜物がないと悩む必要は全くありません。主は一部とするために、御霊によってキリストの体に入れてくださったのです。賜物は必ず与えられています。